

山間樹園地集落における鳥獣害に対する農家意識 Farmers' Attitudes toward Agricultural Damage by Wildlife in Mountainous Orchard Area

○松村広太* 九鬼康彰* 武山絵美**

○Kota MATSUMURA, Yasuaki KUKI and Emi TAKEYAMA

1. はじめに 現在わが国の農山村では少子高齢化、過疎化の問題に加えて鳥獣害にも悩まされている。農林水産省の調べによると2004年度の鳥獣害被害面積は約14万haにも上り、各地で様々な鳥獣害防止に向けた取り組みが行われている。鳥獣害に関しては、これまで主として有害獣の生態学的な見地から研究が行われてきた。しかし生態学的に有効と考えられる対策が、多くの農山村では少子高齢化や過疎化に直面しているために、実際には効果的に実施できない状況が問題視されつつある。この点を踏まえると、今後鳥獣害に関する問題解決を前進させるには、有害獣を対象とする研究に加えて鳥獣害が発生する現場を取り巻く地理的及び社会的状況も含めた研究が求められる。

そこで、本研究では和歌山県田辺市上芳養地区の農家を対象とする鳥獣害についての意識に関するアンケート調査から、被害農地の特徴や被害農家の鳥獣害に対する意識の特徴等について考察を行う。

2. 対象地区の概要 上芳養地区は6つの集落からなり、標高300~500mの山に囲まれた山村である。人口は1940人(2006年2月)で、古くからウメやミカンの栽培が盛んな地域である。山を切り拓く形で樹園地は傾斜地を中心に増加し、2000年には地区の経営耕地面積約419haの95.3%を占めるに至っている。一方農業就業人口に占める65歳以上の割合は年々増加を続け、2000年には38.0%と高齢化が進行している。しかし耕作放棄地率は2000年で2.15%と比較的少ない。

3. アンケート調査の概要 アンケート調査は地区の農家を対象に、2006年1月に実施した。調査項目は農業経営の現状と今後の意向、鳥獣害の状況や現在の対策、今後の取り組みに対する考え方などについてである。アンケートの配布は集落ごとに説明の機会を設けて行い、回収はJA紀南上芳養支所に依頼した。342戸の農家に配布した結果、257戸から回答を得た(有効回収率75.1%)。

4. 調査結果の分析 地区では、被害に遭った経験がある獣種(複数回答)として、イノシシ(選択率75%)、ウサギ、サル、アライグマを挙げる人が多かった。また被害を受ける農地(複数回答)には樹園地(ウメ)、樹園地(ミカン)を挙げる人が多かった。さらに被害によく遭う農地の立地条件(複数回答)は、自宅から遠い、広葉樹の山際にある、周りの家から

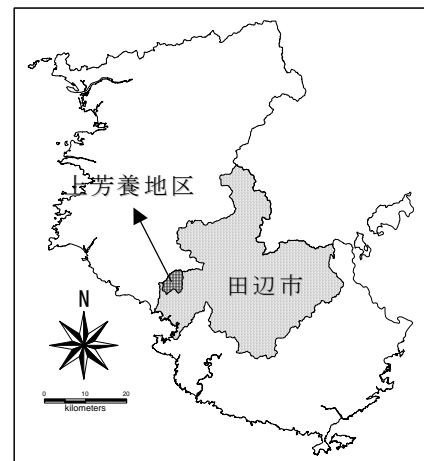


Fig.1 上芳養地区の位置
Location of KAMIHAYA district

*京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University

**愛媛大学農学部 Faculty of Agriculture, Ehime University

キーワード；鳥獣害，農家意識，樹園地

見えないなど、人目が届かない場所に多い傾向が得られた。

Table 1 個人で実施している鳥獣害対策とその問題点(複数回答)
Relation Measures for Preventing Wildlife Attack and Their Problems

	物理的対応				駆除		生態学的対応					その他(%)	
	トタン板の設置(%)	ネットの設置(%)	金網の設置(%)	電気柵の設置(%)	防風ネットの設置(%)	檻を用いた駆除(%)	縄なやくくりわなを用いた駆除(%)	忌避材の設置(%)	見通しを良くするための除草、伐採(%)	農地周辺での見回り(%)	獣道を人や犬が歩く(%)		獣のエサとなるものの除去(%)
獣害の防止効果が低い	23.8	45.7	25.0	33.3	38.5	38.5	25.0	51.3	75.0	44.4	75.0	63.2	50.0
設置、管理に労力がかかる	85.7	65.7	100	55.6	61.5	30.8	62.5	51.3	62.5	44.4	62.5	57.9	50.0
設置、管理の費用が高い	57.1	40.0	50.0	66.7	53.8	30.8	56.3	33.3	50.0	44.4	25.0	26.3	25.0
景観を害する	4.8	5.7	0	0	15.4	0	0	2.6	0	0	0	5.3	12.5
適切な実施方法がわかりにくい	9.5	5.7	12.5	11.1	15.4	30.8	12.5	25.6	37.5	11.1	25.0	26.3	12.5
その他	4.8	5.7	0	0	7.7	0	6.3	2.6	0	0	0	5.3	25.0
選択人数	21(人)	35(人)	8(人)	9(人)	13(人)	13(人)	16(人)	39(人)	8(人)	9(人)	8(人)	19(人)	8(人)

次に現在実施している鳥獣害対策とその問題点の関係(Table 1)を見ると、各対策を行っている人数はネットと忌避材の設置を除いて全体的に少ないことが言える。また、景観を害するとの意見が多かったのは防風ネット設置のみであった。対象地区に限らず全国で広く用いられているトタン板やネット等の物理的な柵を設置している場合、労力がかかる点に問題を感じる人が多い。また駆除対策を比較すると、檻を用いた場合には効果と実施方法の分かりにくさに問題を感じているが、縄なやくくりわなを用いた場合には費用がかかる点と労力を問題と感じる割合が高い傾向がうかがえる。さらに、生態学の研究から有効とされる開放空間確保のための除草や獣道を人や犬が歩くとといった対策を実施している場合は、防止効果が低いと感じる人が多い他、適切な実施方法が分かりにくいと感じる人も他の対策に比べて多いことが分かる。

続いて今後の鳥獣害への取り組み方では、「実施は考えていない」と回答した農家は全体の1割に満たず、何らかの形で鳥獣害対策に取り組むたいと考える人が多く、鳥獣害対策について前向きな姿勢が見られた。具体的な取り組み体制では、個人で取り組む、農家同士で協力して取り組むといった項目を選ぶ人が多く、非農家も含めた協力体制で取り組むと答えた農家は少なかった。年齢別では(Fig.2)、30~49歳で周囲に呼びかけて取り組みたいと考える人の割合が多い。これは30~40歳代では比較的若く体力がある上に、ある程度の経験も積んでいるので、鳥獣害対策について中心的な役割を担って周囲と協力しながら獣害対策に取り組む、農業の収益性をさらに高めたいと考えるリーダーシップをもつ人が多いためと考えられる。一方70歳以上では、周囲から呼びかけがあれば参加すると答える人が多くなっている。これは高齢化による体力の衰えから、他の農家と協力して若い農家の力を借りなければ獣害対策を行うことが困難と感じていることの表れと考えられる。

5. おわりに 今後はアンケートの結果を集落別でのクロス集計などで見ることによって、農業経営や農地の立地といった条件と鳥獣害対策に関する農家意識との関係性を明らかにする予定である。

謝辞 アンケート調査の実施にあたってご協力いただいた JA 紀南上芳養支所ならびに田辺市、また回答にご協力いただいた上芳養地区の農家の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

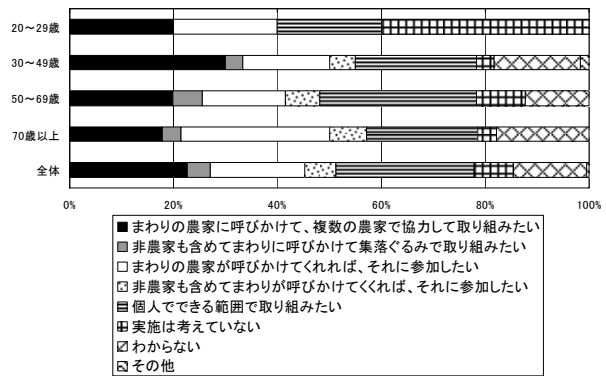


Fig.2 回答者の年齢と鳥獣害対策実施に対する意向(択一回答)

Relation Respondents' Age and Intention of Participation of Preventing Wildlife Attack in Future